

# 本県石灰で「白鷺」復活へ

## 姫路城修理に活躍

本県産石灰で白鷺(しらさぎ)がよみがえる。「白鷺城」と呼ばれる世界文化遺産の国宝・姫路城(兵庫県姫路市)で半世紀ぶりに行われている「平成の大修理」に、本県の漆喰(しっくい)素材が使われている。真っ白な天守閣を元の

姿へ戻すため、田中石灰工業(高知市五台山、田中克也社長)の石灰が使われており、作業する職人の間でも高評価。同社は「伝統にこだわった結果。土佐の誇りを感じる」と喜んでいる。

(池田洋平、大山哲也)

工事事務所に納入している。本県産石灰はもとも不純物が少なく、仕上がりが白い特徴があり、同社は100年以上続く伝統製法を堅持。土中釜で石灰石をコークスと一緒に3〜7日間かけてじっくり焼いて仕上げている。

2009年10月に始まった今回の修理は、高さ46層の天守閣を「素屋根(すやね)」と呼ばれる建屋で覆い、壁の修復や瓦のふき替え、耐震補強などを施す。特に屋根瓦の継ぎ目に漆喰を塗り、白い幾何学模様を浮かび上がらせる「屋根目地漆喰」は、国内ではほかに松山城と熊本城くらいで数少ない。

白鷺が羽を広げたような美しさ、と形容される姫路城。その魅力を支えているのが白い漆喰で、同社は漆喰の材料の「土佐塩焼灰」という石灰を、現地の

同社の製品はこれまで、京都

天守閣の屋根に上って、ここで器用に漆喰を塗っていた職人の一人は「作業がしやすい。左官の技術が出せる素材だ」と同社の製品を評価。田中社長は「本県産石灰は江戸時代から木材、和紙とともに『土佐三白』と呼ばれてきた。国宝の修復に使われるのは名誉。今後も伝統を維持していきたい」と話している。

約140トの本県産石灰が使われる「平成の大修理」。15年3月に終わる予定で、白鷺は再び美しい白い羽を広げる。



天守閣最上層で続く修復作業。本県産石灰がふんだんに使われている(兵庫県姫路市の姫路城)

### 田中石灰工業製 伝統維持の品質評価



「白鷺城」と呼ばれるほど、白く美しい姫路城。修復中の現在は工事用建屋に覆われている(姫路市提供)

約140トの本県産石灰が使われる「平成の大修理」。15年3月に終わる予定で、白鷺は再び美しい白い羽を広げる。